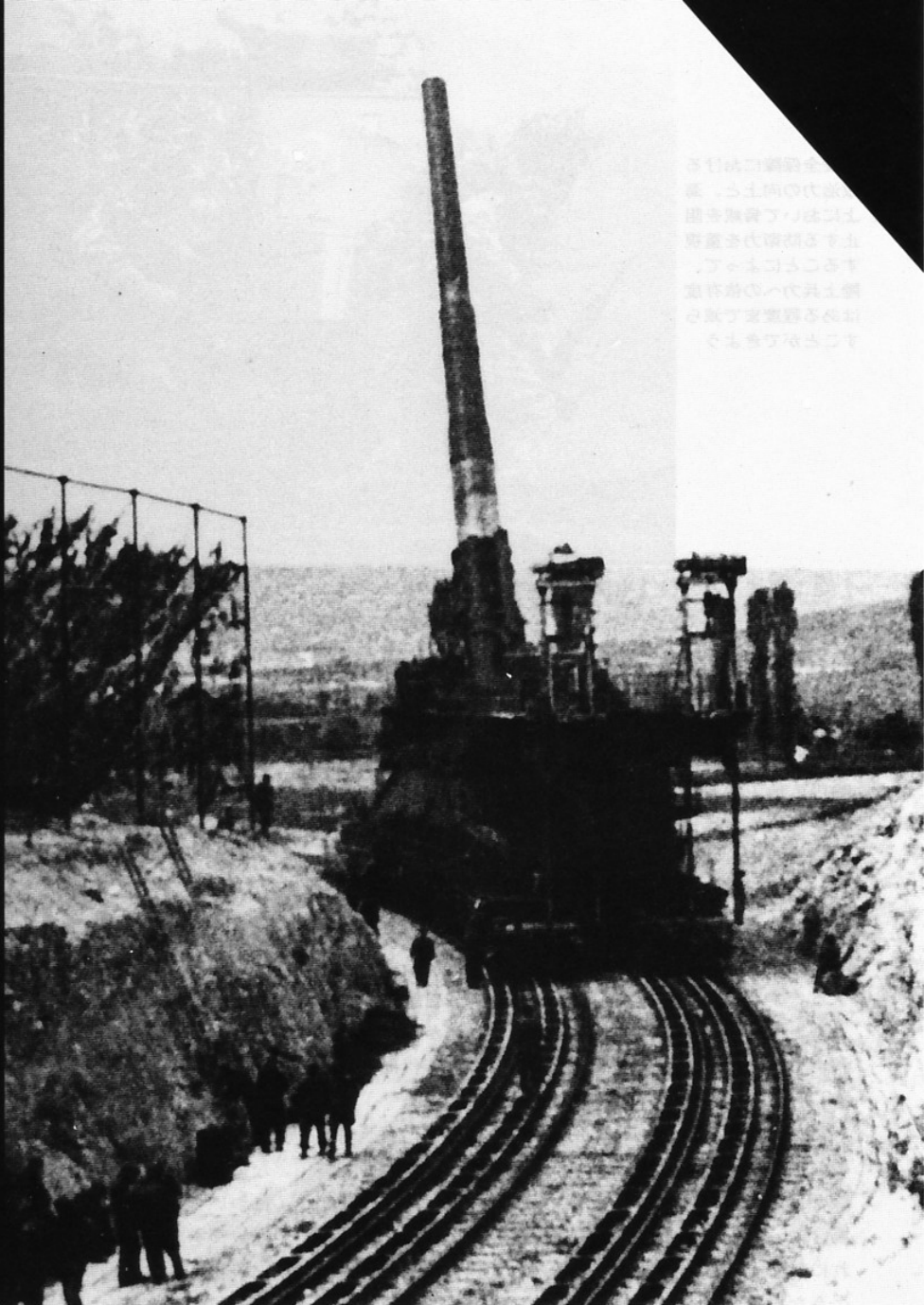


大消耗戦となった クリミア半島の戦い



▶砲撃態勢をとる80cm列車砲グスタフ

ドイツ第11軍

ソビエト・ロシアの南端、その北東にアゾフ海、南に黒海を臨むクリミア半島は東に石油の宝庫カフカス、西にルーマニア、ブルガリアが位置するバルカン半島、黒海を隔ててその正面にはトルコが控えている要衝で、この半島はその四方をにらみつけている監視所のような位置にあった。世界史上においてもこの半島の意味は重要で、1853～56年にかけて南下政策をとるロシアとトルコ、英、仏、サルディニア連合軍が激しくぶつかりあったクリミア戦争は有名である。

1941年9月1日、ドイツ南方軍集団戦区、ドニエプル河西岸のペリスラフを攻略したドイツ第22歩兵師団は、ここに橋頭堡を確保、橋を架けることに成功し、マンシュタイン上級大将の指揮する第11軍は、ここから続々とクリミア・ロストフ方面、カフカスの戦場へ向けて歩を進めていった。

マンシュタインが、この軍集団で最も南に配置された第11軍の指揮を任されたのは1941年9月12日で、それまでの同軍指揮官フォン・ショーベルト将軍の戦死直後、北方軍集団第56機甲軍団長からの昇進、抜擢だった。

ルントシュテット元帥の南方軍集団はまず8月1日、

黒海の要衝でくり広げられた鉄と火の一大攻防戦

伊藤裕之助

黒海オデッサの北、ウマーニでロシア25コ師団を殲滅、そして9月14日にはグデーリアンと協力してキエフ包囲戦を成功させていた。

この時期の東部戦線全体の戦況を概観する中で、何よりも大きくその戦略を決定づけたのが、ヒトラーのこの巨大な東部戦線に対する考えの変化だった。彼は当初予定していたレニングラード、モスクワなどの重要都市を最初に攻略することよりも、石油、石炭、鉄など戦争資源が豊富にあるウクライナ地方、ドニエツの工業地帯、そしてカフカス方面を何よりも欲したのである。つまり彼は戦争経済を最優先としたのだった。

とにかく、マンシュタインが第11軍の指揮を執った時期は、このヒトラーの甘い判断による戦略が本格的に始動しようとしていた真只中であつた。

モスクワをねらう“タイフーン”作戦は、1941年の9月末～10月中旬にかけてのウィヤジマープリャンスクの二重包囲作戦の成功（捕虜66万！）をもってさらに押し進められていく。そしてこの南方軍集団戦区でも、クライストの第1機甲集団がキエフ包囲戦を終え再び東進、ドニエプルとドニエツ河の間に展開し、ロストフを目指した。そして、マンシュタインの第11軍は1940年にロシアがルーマニアから奪ったベッサラビア地方の占領の後、9月1日に前記したようにベリスラフにおいてドニエプル河渡河点を確保、その兵力でクリミア半島、そして同時にロストフ方面へも向かうというものであつた。

クリミアとロストフは、ルントシュテットの南方軍集団にとってはこの1941年中に攻略を予定された最重要拠点で、双方とも石油の豊庫カフカスへの入口ともいえる位置にあり、またロストフは、南部ロシアの交通網の一大中心都市でもあつた。

クリミア、そしてロストフの先にはスターリングラード、そしてアストラハンがある。ここはヒトラーの東部軍にとっての南における最終到達ラインだが、マンシュタインにとってはそのような遠い目標を見ている余裕はなかつた。第11軍の現有の兵力で、2つの要衝を同時に攻略することができるのか？

9月12日、前任者のフォン・ショーベルト大將が戦死したこの日までに、第11軍配下第30軍団と第49山岳軍団はベリスラフ東のアントノフカへ、その南の第54軍団配下第22、第73歩兵師団、そしてSS（自動車化）師団“アドルフ・ヒトラー”の有名なクルト・マイヤー指揮

の偵察大隊の兵士達は、黒海東端のペレコプ地峡へ向かつていた。

ロシア本土からクリミアへ至る通路は3カ所あり、東の幅わずか数百mにすぎないゲニチュスク回廊、中央のサルコウォの鉄橋、そして大部隊の移動に唯一適しているのがこの幅7kmのペレコプ地峡であつた。

しかし、当然この地峡はロシア軍の奥行き深い陣地（15世紀のトルコ時代に構築された深さ12～15mのタートル壕がその中心）によって守られており、マイヤー達の最初の攻撃は頑強な抵抗に会い成功しなかつた。ここの堅固な守りを突破するには、兵力が少な過ぎたのだった。これは攻撃する前からマイヤーにもわかつていたようで、彼はこう記している。

「真夜中頃、第73歩兵師団司令部から、ペレコプ地峡を強行突破し、イシュンの南で後命を待てと連絡があつた。これまでも方々で、古典的用兵の原則に合わない命令や指示はいろいろと受けてきたが、この命令ほどのものはなかつた。責任ある地位のお偉方たちは、地峡を小部隊で強襲することによりクリミアへの門が開くと本気で思っているのか？中隊長たちは、命令を伝え状況を説明する私の顔をあきれてながめていた」

このマイヤーの言葉からは、戦況を楽観視している上層部への不満が明瞭に読みとれるが、9月17日にショーベルトから指揮を受け継いだマンシュタインも、このクリミアをめぐる戦いが一筋縄ではいかないことが見てとれた。彼は自問した。現有の兵力でクリミアとロストフの両目標攻略が達成できるのか？答えは否であつた。彼はまず、このクリミア攻略に全力を傾けることに決定し

第11軍司令官マンシュタイン上級大將





ベレコブ地峡のソ連軍陣地に対し砲撃を開始するドイツ軍。ベレコブはドイツ軍にとって、まさに「クリミアへの門」ともいえる要衝だった

たのだった。

＋ペレコブ地峡

マイヤーも記したように、このペレコブ地峡は小手先だけの攻撃では突破できないことを肝に銘じたマンシュタインは、その作戦の第1段階でこの地峡突破に第11軍の全砲兵、工兵、高射砲をまわし、第73、第46、第50の3コ歩兵師団をもってその門をこじあけて、さらにそこから第2段階として先の完全機械化を誇る“アドルフ・ヒトラー”師団とキューブラー將軍の第49山岳軍団を投入、クリミア全土を席卷させ、前者にはセヴァストポリを、後者にはクリミア山脈、そして半島東端のケルチを占領させることとした。

その後、海峡を越えて東岸のカフカス方面へ進出させることまで計算に入れて兵力を集中していた。

マンシュタインはこの作戦の成功を確信した。1941年9月24日から3日間演じられた戦いで、ロシア第51軍の防衛ラインは突破され、ペレコブ南のイシュン地峡の最後の陣にロシア4コ騎兵、狙撃兵師団が投入された。ロシア側にとっては正に背水の陣で、ここを突破されたら

クリミアへ濁流のようにドイツ軍が流れ込んでいくだろう。マンシュタインにとっても作戦第1段階の最後のしめくりで、ここにSS師団と山岳軍団を投入して戦機を決しようとしていた。

しかし、彼の作戦にはひとつ大きな落とし穴があった。ここに上記SS、山岳軍団を投入させるためには、クリミアの北にはるかに広がる広大なノガイ平原でロシア軍と対決していた戦線から兵力を抽出することを意味していた。9月23日に南へ移動を始めた山岳軍団の後がまを受けさせられたのは、ルーマニアの山岳軍団であった。

この同盟軍ルーマニア兵に対して、マンシュタインは次のように厳しい評価を与えている。「戦闘訓練では、戦争経験の欠除から近代戦の各種要求を満たしていなかった。このため過度の損害を招き、これがひいては部隊の士気に影響を及ぼすことになった。一中略一装備面では一部は非近代的であり、また不充分であった。とくに対戦車兵器においては、ソ連軍の機甲攻撃に対してはひとたまりもあるまいと考えられるようなものだった」

いずれにしても、ドイツ軍が移動した後、この弱体なルーマニア軍防衛ラインに、ロシア軍が第9、第18の2コ軍をもって攻勢をかけてきたのだった。マンシュタインにとっては背後を衝かれた形となり、突破されたルーマニア軍の穴を埋めるためには第49山岳軍団を再び呼び戻すしかなかった。さらにその軍団南のザルムート將軍の第30軍団（第22、第72歩兵師団）が守りを任されていたアゾフ海北の戦線でも、ロシア軍が防衛ラインを突破、事態は由々しいものとなっていた。

このままロシア軍が東進すれば、クリミアのドイツ軍と内陸ノガイ平原の軍とが分断され、第11軍は崩壊の危機にさらされかねない。しかしこの時、ロシア軍も背後の注意を怠っていた。

9月のキエフ大包囲戦を終了して次作戦に投入できる態勢にあったクライスト將軍の第1機甲集団は、ザボロ

1942年6月におけるドイツ第11軍の戦闘序列

第11軍（マンシュタイン上級大將）

北部戦区

第54軍団（ハンセン騎兵大將）

第22歩兵師団（ヴォルフ少將）

第24歩兵師団（フォン・テットウ中將）

第50歩兵師団（シュミット少將）

第132歩兵師団（リンデマン少將）

南部戦区

第30軍団（フレッター・ビコ中將）

第28山岳師団（ジンファーバー中將）

第72歩兵師団（ミュラー・ゲーブハルト中將）

第170歩兵師団（ザンダー少將）

射撃姿勢をとる
ソ連軍の対戦車
砲部隊。必死の
抵抗を試みるソ
連軍ではあった
が、短期間のう
ちにイシュン地
峡は突破された



ジェ北のドニエプロベトロフスクでドニエプル河の橋頭堡を確保、そしてここからアゾフ海へ向け南下した同軍は、前記ロシア2コ軍の背後を衝く形となり、今度はロシア軍が一転して崩壊の危機にさらされる側にまわった。

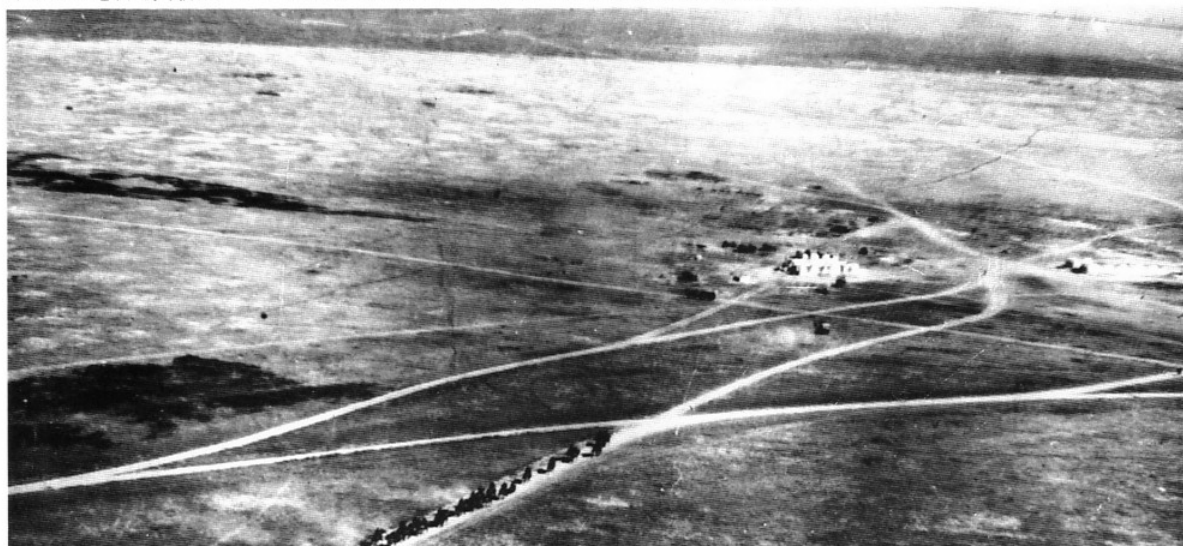
正面を第11軍に、背後を第1機甲集団に囲まれたロシア第18軍は、10月5日～10日にかけての包囲戦でマリウポリとアゾフ海沿いの町ベルジャンスクの間で全滅し、ドイツ軍は6万5000もの捕虜を得て危機を勝利に転じさせた。

この包囲戦の後、マンシュタインは最高司令部から、第11軍はその全兵力をもってクリミア戦のみを担当し、ロストフはクライストの機甲集団に任せる旨の命令を受けた。これで兵力を分散させずに、難攻不落の要塞を腰をかまえて料理することができるようになった。SS「アドルフ・ヒトラー」師団と第49山岳軍団はクライス

トへ引き渡されたが、第11軍はまだ強力であった。この辺りの経緯について、またこれから演じられる戦いについてマンシュタインは以下のように歯切れよく要約している。

「また第11軍のクリミアの戦いは、それに参加した人々の範囲にとどまらず、さらに広く関心を持たれて然るべきである。この戦いは、1コ軍が独自に特定の一戦場で作戦を遂行できたというきわめてまれな場合のひとつといえよう。自力だけを頼りにし、それによって最高統帥部の色々な干渉をも避けることができた。この戦闘においては、間断ない戦闘の10カ月間の攻勢および防勢会戦、機動戦における自由な作戦指導、疾風のような追撃戦、制海権を有する敵の上陸諸作戦、パルチザン戦および堅固な要塞の攻撃等、あらゆる種類の戦闘が次々と戦われたのである」

イシュン地峡を突破したドイツ軍は、セヴァストポリとケルチに向けて進撃を開始した



十半島への突入

9月24日、第46、第73歩兵師団の攻撃が強力な砲兵の支援のもとに行なわれ、歩兵達は身を隠す場所のない草原地帯で1コ1コ深い敵の陣地を奪取していった。9月26日にはベレコプを取り、マンシュタインの軍はイシュン地峡の前に立った。しかし、ロシア軍はこの戦区に第51軍から狙撃兵8コ、騎兵4コ計12コ師団を投入しており、これに加えて10月16日、ルーマニア第4軍に囲まれていた黒海北面の要衝オデッサからベトロフ將軍率いる1コ軍（海岸軍）が海路このクリミアへ向かっていた。

これに対するドイツ第11軍は、最前線の先鋒に第54軍団の第22、第73、第46歩兵3コ師団、その後に第170歩兵師団の一部が、そしてその背後に第30軍団の第72、第170、第50歩兵師団がひかえており、3コ目の軍団、第42軍団の2コ（第32、第24）歩兵師団がクリミアへ向かっていた。

このイシュン地峡は、幅が3～4kmしかなく、師団配置もこのような縦列隊形にせざるを得なかった。

10月18日の朝5時、第11軍全砲兵、ロケット砲兵がうなりをあげて一斉に砲門を開き、歩兵達はその30分後に前進を開始した。ロシア軍防衛陣地は幾重にも渡って築かれ、鉄条網、地雷原は無数に存在した。それでも上記第54軍団の歩兵達は、第190突撃砲大隊の支援のもと、ベトロフの海岸軍を撃破、イシュン地峡は10月28日の総攻撃の日を待たずしてドイツ軍に突破された。ドイツ軍は歩兵達の血みどろの白兵戦の末、クリミアへの門をこじあけることに成功したのだった。

クリミアの地形は、その中央にヤイラ山脈を挟んで西のセヴァストポリを要衝とする戦区と、東のフェオドシアの港町辺りの首がすばまったようにアゾフ海へ突き出たケルチ半島のケルチを要衝とする戦区とに分かれる形となり、イシュンで敵を粉碎したマンシュタインの軍もそれぞれ別の敵を追う展開となった。

とにかく彼の意図は、早急な追撃でまだかなりの戦力を有する敵（そして彼らは海上からいつでも補充を受けられる可能性を持っていた）に防衛ラインを敷くことを許さず、その主力がセヴァストポリ、ケルチに入る前に

イシュン地峡の突破とクリミア半島への侵攻





クリミア半島の戦いでは、各種野砲とともにJU-87を初めとする航空機も、ソ連軍に対し猛威をふるった

捕捉、撃滅することになった。

この実現のため、まず第73、第46、第170歩兵3コ師団の第42軍団がフェオドシア、ケルチ戦区へ投入され、退却する敵を追った。そして、主戦線ともいえる西では、右翼に第30軍団の2コ（第22、第72）歩兵師団が南下、シンフェロポリ方面へ敵を追撃、その左翼には第54軍団の第50、第132歩兵師団と臨時編成の自動車化旅団がバフサライを経由して直接セヴァストポリへ向かった。

マンシュタインの軍には機甲、自動車化師団が欠けており、ティーグラー大佐に率いられたこの快速旅団はルーマニアの自動車化歩兵連隊、ドイツ軍の偵察、戦車猟兵大隊、自動車化砲兵などを混成した臨時部隊であった。マンシュタインはこれら各部隊の進撃に期待し、その迅速な攻撃によってセヴァストポリを奇襲で攻略することを考えていた。

その思惑どおり、各師団は順調な進撃をみせて、11月1日にはティーグラーの快速旅団がシンフェロポリを、そして東戦区では11月3日に第170歩兵師団がフェオド

シアを占領、第46歩兵師団とバルパチを越えた第42軍団は11月15日、ケルチ要塞を陥落させ、わずかな敵がここからケルチ海峡を渡ってクバン半島へ逃げ帰れたのみであった。

西戦区もシンフェロポリが陥ちた後、第72歩兵師団は半島の南端ヤルタを占領、そして西へ向かいセヴァストポリ要塞の南端バラクラク堡壘を攻略、この時点で敵はこの要塞へ通ずるすべての退却路を遮断され、要塞は北東および南東から囲まれる形となっていた。

それでも要塞内の敵はまだ強力で、無傷の海兵4コ旅団、要塞砲兵、士官学校旅団、ここに退却した海岸軍、海軍基地の労働者からなる無数の大隊が要塞備蓄の兵器によって武装され、迫るドイツ軍に対して頑強な抵抗をみせ始めていた。こうして11月中旬、マンシュタインには奇襲による要塞攻略が、自軍に対する補給問題も重なって不可能なことがはっきりし、第11軍は総攻撃の準備のため、一時要塞周辺に腰をすえることになった。

イシュン地峡突破後のドイツ軍は、後退するソ連軍部隊を追い求めて順調に進撃していった



＋ロシア軍の反撃

マンシュタインは、この難攻不落の要塞を陥とすための準備を急いだ。時間が過ぎれば過ぎるほどドイツ軍にとっては不利に、ロシア軍には有利に働いた。敵は海上路から新手を補充でき増強されていく。マンシュタインは、クリスマスまでにここをとりたかった。

彼は攻撃の重点を防禦は薄いが險しく道路網の貧弱な南東にはなく、要塞正面ともいえる北および北東からかけることに決定し、この攻撃に第11軍のほとんど全力を注ぐことにしてケルチ半島の第42軍団から第170歩兵師団を抽出した。こうしてケルチの守りを任されたグラ

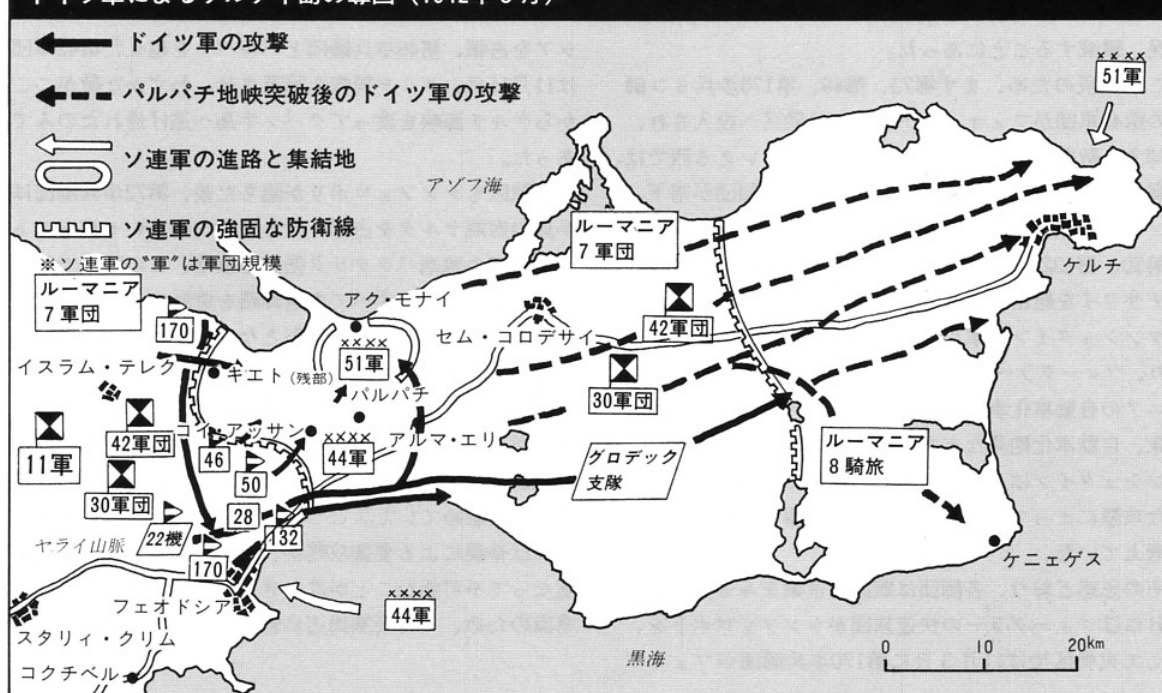
マンシュタインは述べている。「敵が頑強に防衛している各火点を巡る激しい争奪戦は、部隊をみるみる消耗させた。今や厳寒は否応なく猛威を奮った」

それでも第54軍団の各師団、連隊は血路を開き、12月28日までにはセヴァストポリ北部正面を制圧し、“スターリン” 堡壘前面まで進出した。

セヴァストポリ前面の戦況は、あと一押しでここを攻略できるだろう。正にこのような状況の中、前記ケルチ半島のルーマニア軍とドイツ第46歩兵師団のみに守りが任されていた戦区に、ロシア軍が上陸したのだった。

まず26日にケルチに、次いで29日にはフェオドシアに敵大兵力が橋頭堡を確保した。どうするか？マンシュタ

ドイツ軍によるケルチ半島の奪回 (1942年 5月)



フ・フォン・シュボネック將軍の軍団には、第46歩兵師団1コしか残されていなかった。

セヴァストポリ総攻撃が始まる12月中旬、この東戦区ケルチ方面は第11軍のアキレス腱ともいえる戦区となり、これは後述することになる。

12月17日早朝、第54軍団戦区全域に渡り各種口径の火炮が轟音と共に砲火を開き、空には急降下爆撃機群が鋭いうなりとともに乱舞して敵陣に爆弾を落とし続けた。この日から28日までの数日の戦闘は正に血で血をあがなう白兵戦の連続で、ドイツ軍はうなり続ける無数の陣地、機銃座、マキシム・ゴリキー要塞砲の30.5cm砲弾を初めとして、雨あられと注ぐ砲撃の中を出血しながら進んでいった。

インは決断を迫られた。今やセヴァストポリはこのまま攻撃を続ければ手の届くところにある。しかし、ケルチ半島のロシア軍もほうっておけば、第11軍全体の崩壊につながるような危機をもたらすだろう。

彼は、セヴァストポリ正面北部では第22歩兵師団にスターリン堡壘の奪取を続行させ、東からの攻撃を中止、そこの第30軍団から第170歩兵師団をケルチ方面へ向かわせた。無論ケルチの第42軍団は、この援軍が到着するまでこの半島を守り抜く義務を負わねばならない。

マンシュタインはケルチを手離したくなかった。だが1941年12月29日、軍司令部にシュボネックの第42軍団から連絡が届いた。「司令部はケルチ半島を撤退。第46歩兵師団はバルパチ地峡に移動中」

砲撃準備中の80cm列車砲グスタフ。セヴァストポリ攻撃では、これら重砲群がまさに主役として活躍した



第42軍団長シュボネック将軍は、マンシュタインの命令を無視し独断でこの半島から離脱、フェオドシア方面に上陸した敵に対すべくケルチの前線を捨てて後退したのだった。

この年の大みそかまで戦機を決したかったマンシュタインにとって、このロシア軍の大胆な作戦はそれを反古にしたのだった。ケルチを撤退した第46歩兵師団は、駆けつけた第170、第73歩兵師団と共にフェオドシア前面で上陸したロシア軍に対して防戦に入ったが、一方でスターリン堡壘に最後の突撃を試みた第22歩兵師団、フォン・コルティッツ大佐の第16連隊の攻撃も潰えた。

この大みそかを境に戦線は膠着、マンシュタインが望むクリミア全土制圧は翌年の春まで待たねばならなくなった（公然たる命令違反として第42軍団に撤退を命じたシュボネック将軍は、指揮権を剥奪され軍法会議で死刑を宣告されたが、ヒトラーの口添えで7年の禁錮刑に減刑された。しかし1944年7月20日、ヒトラー暗殺事件のその日にSSによって銃殺されている）。

1941年の冬は、ドイツ東部遠征軍にとって極めて不本意な終わり方を甘受しなければならない厳しい冬となった。レニングラードは、封鎖こそ続けているもののまだロシア軍の手に残り、モスクワは、その前面数kmまで迫ったにもかかわらず攻撃は潰え、もはや手の届かぬ目標となっていた。

翌1942年春、ドイツ南方軍集団戦区では、新たな希望に満ちた大計画の準備が着々と進められていた。その構想の中心はカフカスに向けての大攻勢で、ドニエツとドン河の間の敵を壊滅させ、カフカスにいたる峠を占領、次いで、カスピ海沿岸の大油田地区をドイツ軍が手中に収めるというもので、この遠大な作戦にも当然クリミア

は大きな役割を任わされていた。

スターリンにとってここに第11軍を引きとめておくことは、同軍をカフカス攻撃へ参加させることを不可能とさせ、戦略的にも大きなメリットを持っていた。無論マンシュタインもこのことは充分認識しており、この半島での決着を早くつけたかった。

まず彼が欲したのは、前年冬に失われたケルチ半島の再奪取で、1942年5月8日、前年の雪辱に燃える第42軍団（マッテンクロット将軍）と第30軍団の第170、第46、砲撃する60cm自走臼砲カール





◀ソ連軍の堅固な堡壘に向けて斉射されるネーベル・ヴェルファー▼破壊されたマキシム・ゴリキーIIの砲台

第50、第132の4コ歩兵師団、第28山岳師団、そしてこのクリミアに唯一投入された第22機甲師団をもって、ケルチ半島奪回の“雁鴉（Trappen-Jagd）”作戦が開始された。

ドイツ軍の攻撃精神は高く、ロシア軍防衛陣地を粉碎しながら5月16日には先鋒部隊がケルチへ到達、ロシア軍はこの戦いで捕虜17万、砲1133門、戦車257輛の代償を払わされ、完全に打ちのめされたのだった。

十火と鉄の饗宴！

第2次セヴァストポリ攻撃諸戦の主役は、何といってもそこに投入された各種口径の重砲群だろう。第306砲兵司令部に統轄された1300門からなる野砲群の頂点に立つ鉄の恐竜達と、その巨弾が撃ちこまれた目標を列举してみよう。

- 28cm曲射砲（L12）中隊—鉄道施設関係、城壁ブロックなど。また28cm列車砲は681発をセヴァストポリへ撃ち込んでいる。
- 30.5cm臼砲中隊—第24歩兵師団戦区に配置されたこの砲は、ベルベク村、鉄道施設を砲撃。
- 35.5cm（M1）臼砲中隊—営林署宿舎へ向けて砲撃。
- 42cm曲射砲中隊—Mekensiewy Gory 駅を砲撃。
- 42cm“ガンマ”臼砲—エルバルク、鉄道施設へ砲撃。
- 60cm自走臼砲“カール”—履帯を備えたこの臼砲は重量68t、その砲弾は3.5m厚のベトンを打ち抜く威力を持っており、マキシム・ゴリキー、バステイオン要塞に向けてその巨弾を撃ち込んだ。
- 80cm列車砲“グスタフ”—クリミア砲撃陣の頂点となった超重量級の列車砲で、複線軌道に載せられた台車の上の砲架にそそり立つ32.48mの長砲身。この全重量



1350tにも及ぶ大型恐竜を操作するには、少将指揮下の1420名が必要とされ（実際の砲の運用には500名程度）、その4.8tもの榴弾は、スターリン、モロトフの各要塞、“クリップ”弾薬庫へ向け発射され、その内の一発は地下30mにあった弾薬庫を打ち抜きこれを粉碎、その実力の程を示している。

これらの重砲弾も含め各種野砲、ロケット砲1300門、そして上空には1日延べ1000～1500機もの急降下爆撃機が出撃、乱舞して5日に渡る猛攻撃と爆撃がクリミア周辺を荒れ狂い、敵コンクリート陣地、塹壕、要塞施設を打ち砕いていった。

セヴァストポリ要塞は、その周囲を三重の防禦システムによって囲まれており、その外縁は幅2～3kmの鉄条網と塹壕、トーチカ、地雷原をめぐらせた陣地、そしてセベルナヤ湾北、バルテニェフカ周囲にはマキシム・ゴリキーI号砲台の30.5cm連装砲を初めとする、モロトフ、チュカ、レーニン、GPU、ドニェツ、ウラル、ヴォルガ、スターリン、シベリアの10コの堡壘が囲んでおり、ここがセヴァストポリの最強火力点だった。

そして、セヴァストポリ市周辺にもさらに幾重もの防

禦陣が配置されており、その砲陣勢力は野砲600門、迫撃砲2000門、総兵力は10万以上であった。

前年と同じく、ドイツ軍の攻撃の中心は北戦区で、6月6日、第54軍団の第22、第24、第50、第132各歩兵師団、第73歩兵師団第213連隊の兵士達が第190、第249突撃砲大隊支援のもとロシア軍陣地へ進んでいった。第22歩兵師団は、前年の冬、一度は目の前にありながら手放さなければならなかったスターリン堡壘へ再度挑み、熾烈な白兵戦が演じられた。ここを守っていた青年共産同盟員、政治委員に指導されたロシア兵達は最後の最後まで頑強に抵抗し、第22歩兵師団第16連隊2コ大隊の将校はそのほとんどが戦死していた。

それでもフォン・コルティッツ大佐の連隊は6日13日にここを奪取、前年の義務を果たしたのだった。このとき

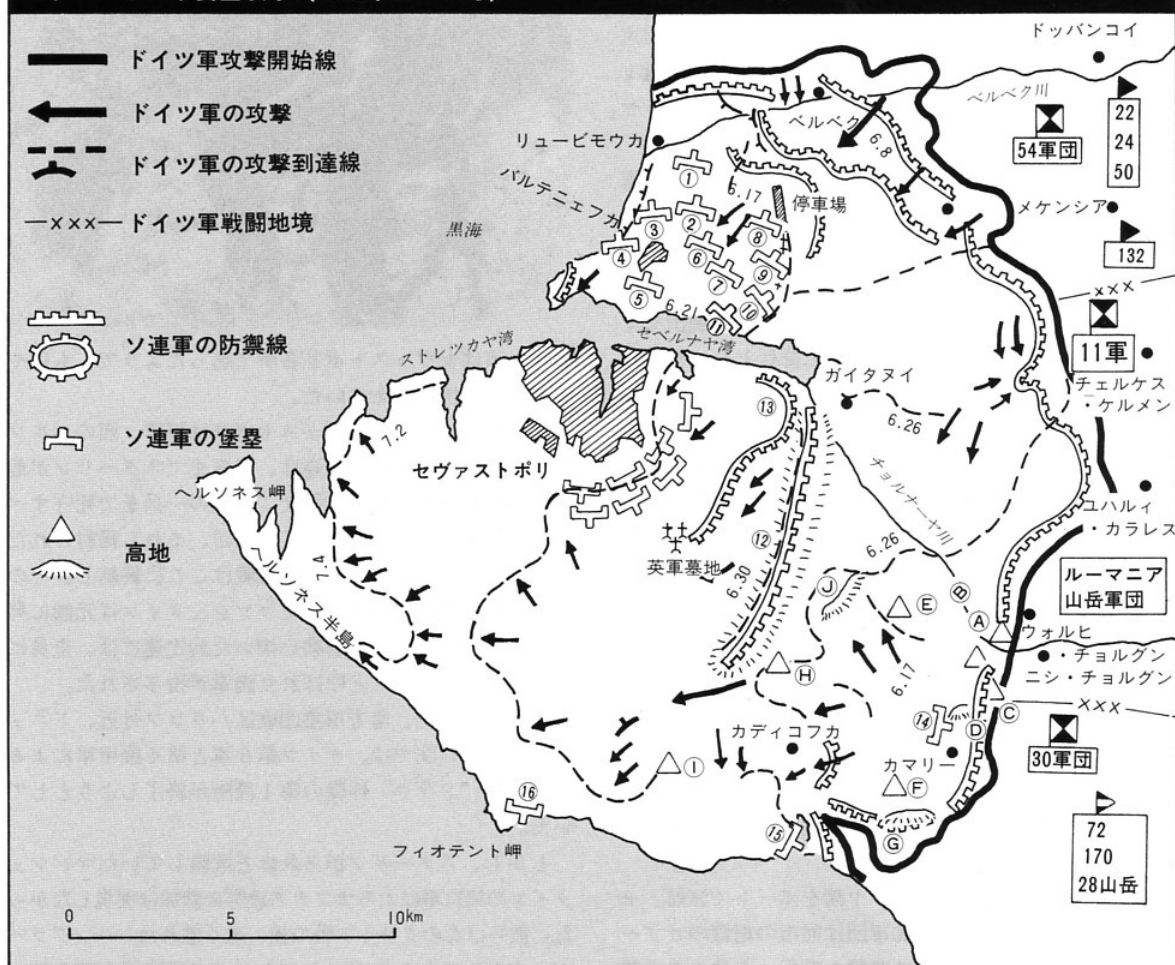
攻撃に参加した一負傷兵は、ずたずたに傷ついた腕と包帯に包まれた頭を示して言った。「なぁに大した傷じゃありません。なにしろわれわれは“スターリン”を取ったんですから」

マンシュタインが引用しているこの一兵士の言葉は、この攻撃に参加した各歩兵達の士気の高さをよく示している。しかし、それでも各師団は手ひどく出血し、消耗していった。

6月17日、マンシュタインは北戦区全域に渡る総攻撃を指令、絶え間ない砲撃、硝煙の中で身をかがめていた歩兵達は再び前進を始めた。

第213歩兵連隊はヒッツフェルト大佐指揮のもと、ベルベク谷西に位置してベルベク峡谷と黒海海岸への街道を制していた“マキシム・ゴリキー”I号堡壘、そこの

セヴァストポリ要塞攻撃 (1942年6～7月)



①マキシム・ゴリキーI号②モロトフ③チェカ④レーニン⑤北堡壘⑥ゲー・ペー・ウー⑦シベリア⑧スターリン⑨ヴォルガ⑩ドニェツ⑪ウラル⑫ザブーン連丘陣地⑬インケルマン陣地⑭クッペ堡壘⑮バラクラワ堡壘⑯マキシム・ゴリキーII号A砂糖帽子B北方の鼻C礼拝堂山D廃虚の丘Eフェデキューニ高地Fバラ丘G朱色高地(東よりI II III)H鷲高地I風車高地J上り坂高地



◀あらゆる重砲、多数の航空機の猛攻撃を受け、爆煙に包まれるセヴァストポリ要塞▼必死の抵抗もむなしく、ついにセヴァストポリは陥落した

30.5cm装甲砲台の奪取を命ぜられていた。この砲台に対する最初の攻撃は、その東、かんらん山の西4kmの地点に据えつけられた35.5cm臼砲2門に任せられ、その重量1tの巨弾はその砲台の天蓋を撃ち破ってこれを沈黙させ、2連装砲身は各々空を仰いだ。

それでも砲台周囲の関連要塞施設（その武器庫、発電所、工作室などの区画は地下3階にまで達していた）は頑強な抵抗を続け、陥落するまで文字通り“最後の兵”まで戦ったのだった。

政治委員（コミサール）に率いられ、最後に脱出しようとした兵士達は、彼が戦死した後に降伏した。彼らは震え声で「主よ、キリストよ」と唱えながら瓦礫となった要塞から出てきたと記されているが、確かに筆者が所有している第72歩兵師団史の中の第124歩兵連隊によって、ここクリミアで捕虜になったロシア兵達の顔にはうつろな眼とともに驚愕と恐怖に満ちた表情がうかがえた。

このロシア軍の堡壘が並ぶ最重要火点も、各歩兵師団に次々と奪回されていき、6月19日、第22歩兵師団はついにセベルナヤ湾に到達、また6月11日から始まった東の第30軍団第72、第170歩兵師団、第28山岳師団による攻勢も“朱色高地”、“バラ丘”、“廃墟の丘”、“北方の鼻”など各拠点を激戦を交わしながらつぶしていき、6月18日、“驚高地”が陥落、戦いはいよいよ大づめを迎えた。

6月29日早朝、セヴァストポリ要塞の内部防禦線に対する総攻撃が指令された。

第54軍団は制圧したセベルナヤ湾をボートで渡航、セヴァストポリを目指し、第30軍団は同市の南線のザブーン連丘陣地を目指して最後の突撃を敢行、もはやこの時点でロシア軍側に希望はなく、ある村では負傷兵や一般市民の詰っていた城壁内の地下貯蔵庫が狂信的な政治委員によって爆砕され、数千名が生き埋めとなった。この



ような事はセヴァストポリ各所で起ったようで、もはや組織的な抵抗は潰えていた。

7月3日、ついにセヴァストポリは陥落、西のヘルズネス半島のロシア残存兵達は、翌日までスターリンが最後の瞬間まで送り続けた電文「最後の兵まで死守すべし」を忠実に守って抵抗し続けたが、これも掃討された。長く苦しかったクリミア争奪戦はここに終結し、そのドイツ軍の勝利の象徴としてマンシュタインは元帥に昇進、ここで熾烈な戦闘を戦い抜いた兵士達には、全員にクリミア・シールドと呼ばれた腕章が授与された。

そしてその北、南方軍集団戦区ハリコフ付近、ドニエツとドン河の間では、ドイツ第6軍と第4機甲軍による夏期攻勢“ブラウ”作戦の第1段階が終了しようとしていた。

しかし、スターリンがあれほど危惧していたマンシュタインの第11軍によるカフカス攻勢の参加は実現しなかった。彼らはこのクリミア戦の後、遠く離れたレニングラードへ向かわされたのだ。これもドイツ最高司令部の敵ロシアへの過少評価がその根底にあり、この夏の勝利の気概に燃えて発動された攻勢も、スターリングラードの悲劇へとつながっていくのである。